

エレミヤ書1-3章5節 「壊れた水溜」

1A 預言者の召命 1

1B 捕囚までの預言 1-3

2B 主による任命 4-10

3B ユダに下る災い 11-19

1C 見張る神 11-16

2C 救われるエレミヤ 17-19

2A 御民の背信 2-3:5

1B 若かった頃の誠実 1-3

2B 主から離反 4-19

1C 尋ね求めない心 4-9

2C 神を取り替えた国民 10-13

3C 外国の民への依存 14-19

3B 口だけの従順 20-5

本文

1A 預言者の召命 1

1B 捕囚までの預言 1-3

1:1 ベニヤミンの地アナトテにいた祭司のひとり、ヒルキヤの子エレミヤのことば。1:2 アモンの子、ユダの王ヨシヤの時代、その治世の第十三年に、エレミヤに主のことばがあった。1:3 それはさらに、ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの時代にもあり、ヨシヤの子、ユダの王ゼデキヤの第十一年の終わりまで、すなわち、その年の第五の月、エルサレムの民の捕囚の時までであった。

エレミヤ書は、ユダの国が滅んでいくのをそのまま預言していくエレミヤの言葉です。他の預言書と異なり、神の言葉のみならず、その預言を行ないながら嘆き悲しんでいるエレミヤの姿も数多くてきます。

時は、ここに書いてあるようにヨシヤ王の第十三年、紀元前 640 年の時からエルサレムの捕囚の時、586 年の時までのことです。正確には、さらに捕囚後の僅かに残された民とエレミヤが共にいて、彼らがエジプトに下るところまで書いているので、もっと後のことも書いてあります。ですから、イザヤ書の時より約百年の後の話です。イザヤが預言をしていたのは、ウジヤ、アハズ、そしてヒゼキヤが王の時でありましたが、その時からどう変わったかを説明します。

イザヤの時代から、世界の大国はアッシリヤからバビロンに移っています。ヒゼキヤの時の、アッシリヤがエルサレムを取り囲み、18 万 5 千人が一度に滅ぼされましたが、それ以降、アッシリヤ

の力は弱まりました。その間にバビロンが強くなってきました。バビロンは、紀元前 612 年にその首都ニネベを陥落させます。残党がカルケミシュに逃げます。バビロンがこれ以上強くなるのを恐れたエジプトが、北上してアッシリヤを助けようとしします。その時に、そのエジプト軍の動きを阻もうとしたのが、ユダの王ヨシヤです。メギドで戦い、彼は戦死しました。それ以降、ユダはエジプトの支配下に入り、さらにバビロンの支配下に入ります。ネブカデネザルが王位を取った紀元前 605 年に、第一次バビロン捕囚がありました。その時に、ダビデの王族であったダニエルや友人三人が捕え移されています。それから、597 年に第二次バビロン捕囚がありました。王エホヤキンや他の王族、祭司たちが捕え移されています。祭司エゼキエルはその時に捕え移され、そしてバビロンの捕囚の地から、エゼキエル書を預言しています。そして、586 年にゼデキヤがバビロンに齒向かい、それでバビロンはエルサレムとその神殿を完全に破壊して、ユダヤ人を捕え移します。第三次バビロン捕囚です。

そして、主との関わり、霊的な変化がありました。ヒゼキヤが宗教改革を行ないましたが、彼の子マナセが、逆宗教改革を行ないました。すなわち、ヒゼキヤが打ち壊した偶像の数々を建て直し、神殿の中にも設け、ヒノムの谷では赤子を偶像のために火の中に入れて捧げ、多くの無実の罪を流しました。その状況の酷さは、「主がイスラエル人の前で根絶やしにされた異邦人よりも、さらに悪いことを行なわせた。(2列王 21:9)」とある程です。そのため、ユダの民は偶像礼拝から離れなくなりました。そして主は、このことによってユダは滅びから免れないことを語られたのです。

マナセの後にアモンも主の前に悪を行ないましたが、すぐに家臣に殺されました。そしてその子ヨシヤが8歳で王となりました。そして彼は、神殿を改築するという宗教改革を行なっていたのですが、その時に大祭司ヒルキヤが律法の書を見つけ、それを書記シャファンに渡し、王は彼に律法の書を読ませました。それを聞いた王は、衣を裂いて、主の前に泣きました。彼らがまさに、主が憤られると言われている事柄を、ずっと行なってきたことを知ったからです。それでヨシヤは、ヒゼキヤにまさる宗教改革を断行しました。偶像という偶像を取り除き、過越の祭りも再開させました。ところが、エレミヤ書によると彼の宗教改革をもってしても、民の心からは、偶像礼拝は抜けなかったようです。ヨシヤが、エジプトの王パロの戦いで。僅か 40 歳ぐらいで死にました。その後の王は、みな主の前に悪を行ないました。彼らはヨシヤの子エホアハズ、次にエルヤキム、エホヤキン、ゼデキヤですが、みな主の前に悪を行ないました。その間、エレミヤはずっと主の言葉を語り続けました。

そしてエレミヤ自身についてですが、彼は祭司の子です。「ベニヤミンの地アナトテ」というのは、ヨシュアの時に、アロンの子孫の祭司の町として与えられたものです(ヨシュア 21:18)。エルサレムの町の近郊にあります。父の名は「ヒルキヤ」です。ヨシュアが宗教改革を断行した時に共にいた大祭司の名もヒルキヤですが、もしかしたら同じ人かもしれません。さらに、エレミヤのおじにシャルムという人がいます(エレミヤ 32:7)。その妻の名が「フルダ」と言い、ヨシヤが宗教改革を断行する時、彼女が女預言者として神の言葉を告げました(2列王 22:14)。ですからエレミヤは、エ

ルサレムの神殿にも、深く関わることのできる環境にいました。

そしてエレミヤ書について、エレミヤは預言書に、自分のことについて多くを書いているということも特徴的です。その体験は、嘆きであり、悲しみであり、そして迫害でした。「9:1 ああ、私の頭が水であったなら、私の目が涙の泉であったなら、私は昼も夜も、私の娘、私の民の殺された者のために泣こうものを。」と言っています。その彼の言葉の中に、実はイエス様の悲しみ、エルサレムが神に立ち帰らずにローマに滅ぼされてしまう悲しみが現れています。イエス様が弟子たちに、人々はご自身を誰だと言っているかと尋ねられた時に、「エレミヤ」だという者たちもいることを伝えました(マタイ 16:14)。なぜそうなったのか、それは主が悲しみの人であったからです。イザヤ書 53 章 3 節にも書いてありましたね。そして、主はエルサレムに入られる時に、それを見て泣かれましたが、エレミヤの涙はイエス様の涙をも表していました。つまり、悔い改めない頑なな心が滅ぼされてしまうについて、神ご自身が泣いておられるその哀しみを示しているのです。

2B 主による任命 4-10

1:4 次のような主のことばが私にあった。1:5 「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」1:6 そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」1:7 すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。1:8 彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。..主の御告げ。..」

主の預言者、主の働き人に必ずある神からの召しです。そしてキリスト者はみな、神の召しによって救われ、神の召しによってキリストの体の一部とされました。私たちが、自分で選んでキリスト者になっているのではなく、神が選ばれて、自分を救いの中に招き入れられて、自分はその呼びかけに応えた者に過ぎないということは、あまりにも重要な真理です。キリスト者としてつまずいてしまう人は、ここが分からないからつまずいてしまう、と言っても過言ではありません。イスカリオテのユダとその他の弟子の違いはここでした。そして、サウルとダビデの違いもここでした。頑張りではなく、神に召されたということが分かっているからこそ、最後まで信仰を告白できるのです。

ところで神の救いについては、エレミヤと同じように生まれる前から、いやこの世界の基が置かれる前から神は選ばれたことが、エペソ 1 章 4 節に書かれています。そしてパウロは、エレミヤと同じように、母の胎にいる時から自分を神が選び分け、恵みをもって召してくださったとガラテヤ書 1 章 15 節で話しています。つまり、私たちの行ないではなく、もっぱら神の恵みによるのです。自分の働きではなく、もっぱら神の働きなのです。私たちはあくまでも僕で、主人公は神ご自身なのだということです。

そして、神の召しというのは、自分の能力ではない、いや能力では到底できないことを行なうとい

うことを知らないといけません。エレミヤは、「まだ若くて、どう語っていいかわかりません。」と言いました。彼は当時、20歳そこそこだったのではないかとされています。その若造が、なんと国々の預言者として任命されたのです。ユダという一国の預言者だけでなく、世界の国々に対して語らなければいけない人になりました。そこで主は、「まだ若い、と言うな。」と言われます。そして能力ではなくて、しもべに徹することができるかどうか、自分を主に言われるとおりに行ない、言われるとおりに語ることができるかにかかっています。主は、どんなところにも行き、どんなことも語れ、と命じておられます。

最後に、主に命じられたことを語ることで、反対に遭い、迫害を受けるけれども、主が守り、主が救ってくださると保障してくださっています。主が命令しておられるのですから、責任は主にあります。主はご自分のしもべを守ってくださいます。

1:9 そのとき、主は御手を伸ばして、私の口に触れ、主は私に仰せられた。「今、わたしのことばをあなたの口に授けた。1:10 見よ。わたしは、きょう、あなたを諸国の民と王国の上に任命し、あるいは引き抜き、あるいは引き倒し、あるいは滅ぼし、あるいはこわし、あるいは建て、また植えさせる。」

ここに、エレミヤ書を読む大きな醍醐味があります。それは、ユダの国を滅ぼすのは、良いものを生み出すためであるということです。引き抜くのは、植えるためです。滅ぼすのは、建てるためです。ユダが偶像礼拝に陥って、その古い性質が救われようがないことを知って、主はその古いものを滅ぼすことによって、彼らを新しくしようとされています。私たちが五年前、宮城県東松島で救援活動を行っていた時に、その地区長の方が教えてくださいましたが、区画整理ができたのは以前の津波が起こった時、確か江戸時代の時のことだったそうです。滅ぼされるということは、そこに新しいものを入れられる機会であります。

3B ユダに下る災い 11-19

1C 見張る神 11-16

1:11 次のような主のことばが私にあった。「エレミヤ。あなたは何を見ているのか。」そこで私は言った。「アーモンドの枝を見えています。」1:12 すると主は私に仰せられた。「よく見たものだ。わたしのことばを実現しようと、わたしは見張っているからだ。」

主はエレミヤに二つの幻をお見せになりますが、一つ目はアーモンドの木です。これは、イスラエルの地方の桜のような存在です。聖地旅行に二月下旬に行きますと、アーモンドの木からピンク色の花が咲き乱れて、日本のソメイヨシノのようにきれいです。私たちが、桜が咲こうとしている時に、その枝を見つめているその時の様子を描いているのです。私も家から駅まで歩く時に、桜並木を通るのですが、開花はまだだろうかと枝を見上げて歩いていました。同じように主は、ユダの国が滅びることを、一時も目を離さないで、そのご自分の言葉が成就する時まで見つめておら

れるということでもあります。

午前礼拝でお話ししましたが、これはちょうど、愛する人が癌患者で病床にいて、医者から余命を告げられているので、その一日一日を克明に記録していくのと似ています。とても、とても辛い作業ですが、その人を愛するがゆえに見つめてくのです。つまり私たちが罪を犯している時でさえ、神は私たちを離れず、ずっと見つめてくださっているということです。ご自身の愛のゆえに、悔い改めを強いることはできません。しかし、見捨てもおられません。エレミヤはエルサレムが破壊されても、それでもエルサレムから離れませんでした。主ご自身もその滅びたエルサレムに共におられたのです。

1:13 再び、私に次のような主のことばがあった。「何を見ているのか。」そこで私は言った。「煮え立っているかまを見えています。それは北のほうからこちらに傾いています。」1:14 すると主は私に仰せられた。「わざわざ、北からこの地の全住民の上に、降りかかる。1:15 今、わたしは北のすべての王国の民に呼びかけているからだ。…主の御告げ。…彼らは来て、エルサレムの門の入口と、周囲のすべての城壁と、ユダのすべての町に向かって、それぞれの王座を設ける。1:16 しかし、わたしは、彼らのすべての悪にさばきを下す。彼らはわたしを捨てて、ほかの神々にいけにえをささげ、自分の手で造った物を拝んだからだ。

北から来る軍勢とは、バビロンのことです。バビロンがエルサレムの中に王座を設けるところまでしてしまいます。彼らの主権が取り除かれます。その理由が明確です。「主ご自身を捨てて、他の偶像を拝んだから」ということです。私たちは人間的には、国際情勢などの世界の不安定を見て、また国内における社会問題や天災を見て、それがまさか自分たちの霊的問題に関わりがないと思っていますが、実は大いに関係します。主が、私たちの祈りを聞かれないように物事を進められることさえあります。しかし、それは神ご自身が私たちの心を探ってください、私たちの心にある偶像を取り除きたいと願っておられるからです。私たちが清められるために、これらのことを注意喚起として起こしておられるのに、そうしたことと自分自身を関係付けないという問題があります。その具体的なことを、主はエレミヤによって、はっきりとお語りになっているのです。

2C 救われるエレミヤ 17-19

1:17 さあ、あなたは腰に帯を締め、立ち上がって、わたしがあなたに命じることをみな語れ。彼らの顔におびえるな。さもないと、わたしはあなたを彼らの面前で打ち砕く。1:18 見よ。わたしはきょう、あなたを、全国に、ユダの王たち、首長たち、祭司たち、この国の人々に対して、城壁のある町、鉄の柱、青銅の城壁とした。1:19 だから、彼らがあなたと戦っても、あなたには勝てない。わたしがあなたとともにいて、…主の御告げ。…あなたを救い出すからだ。」

主がエレミヤに、「腰に帯を締め」と言われます。当時の人々は、一枚の布で出来ている衣を着ていましたから、戦いに出る時や体を動かす前に、そのすそを上げて腰の帯で締める行為を行な

いました。つまりこれは、「身を引き締めなさい」ということです。神の召しにかなった、目を覚ました生活をしなさいということ。そして、「彼らの顔におびえるな。」と主は命じられています。これが、神の言葉を伝える時に戦わなければいけないものです。人がどのように反応するのか心配してしまうので、語るべきことを語れなくなります。しかし、人を恐れなくて、むしろ神を恐れないといけません。もし語らなければ、「わたしはあなたを彼らの前で打ち砕く」と主は言われます。語って、彼らがそれを受け入れることはエレミヤの責任にはありません。けれども、語ることについては責任があります。

そして、主が勝利して下さる、救って下さることを約束しておられます。彼らは反対し、迫害し、危害を加えます。しかし、むしろ彼らが滅び、エレミヤは助かるのです。私たちも同じです、福音を語る、御言葉を告げる時に私たちは、防御ではなく攻勢の位置に付いています。見た目は、私たちが反対を受けて、弱い立場にいるように見えるでしょう。いいえ、弱い立場、やばい立場にいるのは、聞いている人々なのです。

2A 御民の背信 2-3:5

そして実際の、エレミヤによるユダの民に対する預言が始まります。これからの預言の内容をかいつままで話しますと、2章から45章までがユダとエルサレムに対する預言です。延々とバビロン捕囚またそれ以後に至るまでの預言を行ないます。そして46章から51章までに周囲の諸国に対する裁きがあります。特にイスラエルを滅ぼしたバビロンに対する裁きが徹底的で、永遠で、完全なものです。そして2章から45章までのユダに対する預言ですが、2章から25章までに説教をしています。合計13あります。そして26章から、これらの説教を聞いた人々の反応を読みます。エレミヤに反対し、迫害していきます。

1B 若かった頃の誠実 1-3

2:1 ついで、私に次のような主のことばがあった。2:2 「さあ、行って、主はこう仰せられると言って、エルサレムの人々の耳に呼ばわれ。わたしは、あなたの若かったころの誠実、婚約時代の愛、荒野の種も蒔かれていない地でのわたしへの従順を覚えている。2:3 イスラエルは主の聖なるもの、その収穫の初穂であった。これを食らう者はだれでも罪に定められ、わざわいをこうむったものだ。…主の御告げ。…」

エレミヤは今、アナトテにいます。そこからエルサレムに行きなさい、と神に命じられています。そこで神殿の敷地かどこか、人々が多くいるところで語っているものと見られます。イスラエルの民が、まだ約束の地に入っていない時、荒野の旅をしている時のことを話しておられます。その時は、何もありませんでした。「種も蒔かれていない」とあります。その何も無い時にこそ、ここにある、「若かったころの誠実、婚約時代の愛」がありました。彼らの拠り頼むことのできるものは、神の臨在のみでした。神がおられるから、マナを食べることができ、神がおられるから、岩から水を飲むことができました。そして荒野においては敵が多くいました。しかし、バラムの呪いを祝福に変

えられたように、主が彼らを守っておられました。

2B 主から離反 4-19

1C 尋ね求めない心 4-9

2:4 ヤコブの家と、イスラエルの家のすべてのやからよ。主のことばを聞け。2:5 主はこう仰せられる。「あなたがたの先祖は、わたしにどんな不正を見つけて、わたしから遠く離れ、むなしいものに従って行って、むなしいものとなったのか。

これは、主ご自身の失恋の叫びと呼んでよいでしょう。婚約時代の誠実をイスラエルが失い、今や、偶像を拝んでいる彼らに対して叫んでいます。今、エレミヤはおそらくは神殿の付近にいます。彼らは一応、神殿礼拝の形態は保っていましたが、敷地の中にもあらゆる、さまざまな偶像やその祭壇が備えていました。「わたしのどこが悪くて、それであなたがたは離れたのか？」と言われていて、多くの人が、神ついて何か悪いことを言って、それで主から離れますが、しかしよく見ると全く妥当な理由ではありません。主は、彼らのご自分に従っていけるように、あらゆることをしてくださっていました。

2:6 彼らは尋ねもしなかった。『主はどこにおられるのか。私たちがエジプトの国から上らせた方、私たちに、荒野の荒れた穴だらけの地、砂漠の死の陰の地、人も通らず、だれも住まない地を行かせた方は。』と。2:7 しかし、わたしはあなたがたを、実り豊かな地に連れてはいり、その良い実を食べさせた。ところが、あなたがたは、はいつて来て、わたしの国を汚し、わたしのゆずりの地を忌みきらうべきものにした。2:8 祭司たちは、『主はどこにおられるのか。』と言わず、律法を取り扱う者たちも、わたしを知らず、牧者たちもわたしにそむき、預言者たちはバアルによって預言して、無益なものに従って行った。2:9 そのため、わたしはなお、あなたがたと争う。…主の御告げ。…また、あなたがたの子孫と争う。

ここでの深刻な霊的な問題は、「尋ねなかった」ということです。6 節に、「尋ねもしなかった」とあります。自分たちが人生の試練に遭った時に、あのエジプトから出て荒野の旅をしていた時に、私たちを助け、私たちに必要を備えてくださった方はどこにおられるのかと尋ねなかったということです。ここが大きな問題です、「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。(4:2)」とヤコブは言いました。約束の地に入ってから、彼らは豊かに与えられているので、自分に不足を感じたり、何かの必要を抱いた時に、主に尋ね求めるという発想が浮かばなくなっていました。そうではなく、自分の周りでその問題を解決できそうなものが沢山あるので、それに拠り頼むことによって解決しようとしているからです。それで、主がこれだけ良くしてくださっているのに、その恵みに応答せず、当たり前のものであるように自分で自分の事を処理しています。

そしてその問題は、指導者たちに蔓延していました。祭司によって、主のご臨在が最も重要なことです。自分自身が主の臨在の中に入り、またイスラエル人を主のご臨在に導くのがその務めな

のに、そのことを尋ね求めていません。今、与えられている業務をこなしているだけです。同じように、主ご自身を知っていなければならないはずの律法学者が、主ご自身に興味がありません。さらに、預言者は主ご自身を求めるのではなく、パアルのような力や知性などの別のものを求めて、それにしたがって、これこれが神の言葉であると言っています。そして、「あなたがたと争う、あなたがたの子孫と争う」と言われていますが、これは彼らが自分たちが主を必要としていることを気づかせるために、葛藤を呼び起こそうとされているということです。

2C 神を取り替えた国民 10-13

2:10 キティムの島々に渡ってよく見よ。ケダルに人を遣わして調べてみよ。このようなことがあったかどうか、よく見よ。2:11 かつて、神々を神々でないものに、取り替えた国民があっただろうか。ところが、わたしの民は、その栄光を無益なものに取り替えた。2:12 天よ。このことに色を失え。おぞ気立て。干上がれ。…主の御告げ。…

「キティム」は地中海に浮かぶキプロス島です。「ケダル」はアラビヤ北部にすむ人々です。彼らはそれぞれ、自分たちの偶像を持っています。そしてその神を他のものに変えたりしません。そうですね、どの異邦の国もそう簡単に他の神々に信仰を変えたりしません。日本なら神道で、インドならヒンズー教とかですね。しかし、なぜイスラエルの民は簡単に変えてしまうのか？という矛盾を主は突いておられます。

私たちキリスト者は、冷静に自分たちの献身について考えないといけません。私たちは、自分たちが信じていた仏教や神道のことと、今の信じているキリスト者としての信仰を考えてみましょう。仏式の葬儀のためには、とてつもない費用をかけます。供養をするにも、お経を唱えてもらうだけで、かなりの金額の謝礼をお坊さんに渡します。これらのことに犠牲を払うことを惜しむことなく行なってきました。ところが、キリストにあって神との個人的な、人格的な関係を持つようになって、それで主に自分を捧げていくときに、同じような犠牲を払うことができないし、献身することができません。何か自分がイエス様に献身しない理由を探しているかのように、何かがあればそれを理由に、主に自分を捧げる生活を放棄してしまいます。仏教や神道でなくてよいでしょう、自分の好きなこと、趣味や、自分の好きなテレビ番組、スポーツ選手であれば、どんなに眠くても赤い目をしてテレビを見続けますが、神の前に出て祈ることについては、五分も立てば眠くなってしまう、ということですが。

2:13 わたしの民は二つの悪を行なった。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘ったのだ。

午前礼拝はここからお話ししました。私たちの命の源を、聖書では「水」に喩えています。主は、いつまでも途切れることのない、湧き出る水、そしていつも新しくしてくれる命を持っておられます。しかし、そうでないものは、主なる神から出てきた命をただ溜めているにしかすぎず、しかも岩に裂

け目のある、漏れていつている水溜です。例えば、愛は神からのものであり、神は愛です。しかし、その愛を他の誰かに頼っているのであれば、それはいずれ枯渇してしまう、水溜のようなものです。

3C 外国の民への依存 14-19

2:14 イスラエルは奴隷なのか。それとも家に生まれたしもべなのか。なぜ、獲物にされたのか。
2:15 若獅子は、これに向かってほえたけり、叫び声をあげて、その地を荒れ果てさせ、その町々は焼かれて住む者もいなくなる。2:16 ノフとタフパヌヘスの子らも、あなたの頭の頂をそりあげる。
2:17 あなたの神、主が、あなたを道に進ませたとき、あなたは主を捨てたので、このことがあなたに起こるのではないか。2:18 今、ナイル川の水を飲みにエジプトの道に向かうとは、いったいどうしたことか。ユーフラテス川の水を飲みにアッシリヤの道に向かうとは、いったいどうしたことか。
2:19 あなたの悪が、あなたを懲らし、あなたの背信が、あなたを責める。だから、知り、見きわめよ。あなたが、あなたの神、主を捨てて、わたしを恐れないのは、どんなに悪く、苦々しいことかを。..万軍の神、主の御告げ。..

イスラエルが、力ある国に依存していることに対して、それがいかに痛々しいことかを語っておられます。ユダ国は、自分たちの迫りくる危機をエジプトに拠り頼むことによって回避しようとしてきました。かつてアハズ王は、アッシリヤに拠り頼みました。そしてヒゼキヤの時代、彼もアッシリヤからの脅威に、エジプトに拠り頼みました。ところが役に立ちませんでした。ますますアッシリヤが勢いを増して、ついにエルサレムが包囲されました。主が憐れんで、彼らをアッシリヤから救い出してくださいました。

しかしバビロンが台頭した今、彼らは再び同じ過ちを犯しています。エジプトは、ヨシヤと戦った後に、エルサレムが立てたエホアハズ王を捕えて、エジプトに連れて行きます。そして、自分たちの傀儡として他の王エホヤキムを立てます。11年間王でしたが、その間に605年にネブカデネザルがバビロンの王になったとき、バビロンに忠誠を変えます。しかし601年にバビロンがエジプトとの戦いに敗れた時に、再びエジプトにエルヤキムが翻ったのです。それでネブカデネザルは598年に軍隊をエルサレムに送り、その戦いの中でエホヤキムは死にます。エルサレムの人々はその子エホヤキン王を立てますが、僅か3か月でバビロンに捕え移されます。バビロンは、エホヤキンのおじゼデキヤを傀儡の王に立てますが、彼も9年後にバビロンに逆らい、586年に捕え移されるのです。この時に、エジプトに頼れば何とかなるといふ甘い期待がずっとありました。

イスラエルは、エジプトから連れ出されて自由の身とされた民です。神の所有の民となることによって、この神のものになることによって、あらゆる人間的な力から解放されています。ところが、今エジプトにあなたがたは拠り頼んでいるのではないかと、それでは奴隷状態にまた戻っているのではないかと主は問い質されているのです。私たちは、主以外の人間に拠り頼む、依存するのは、とても楽なように見えます。確かに、独りで主なる神の前に出ていくことは骨の折れることかもしれませんが、努力が必要です。しかし、人や神以外のものに頼る時に、私たちはキリストにある自由を

自ら放棄して、他のものの奴隷になってしまうのです。パウロはガラテヤ人たちに、こう言いました。「ガラテヤ 5:1 キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」

3B 口だけの従順 20-5

2:20 実に、あなたは昔から自分のくびきを碎き、自分のなわめを断ち切って、『私は逃げ出さない。』と言いながら、すべての高い丘の上や、すべての青々とした木の下で、寝そべって淫行を行っている。2:21 わたしは、あなたをことごとく純良種の良いぶどうとして植えたのに、どうしてあなたは、わたしにとって、質の悪い雑種のぶどうに変わったのか。2:22 たとい、あなたがソーダで身を洗い、たくさんの灰汁を使っても、あなたの咎は、わたしの前では汚れている。…神である主の御告げ。…

ユダの人々の問題は、「自分は大丈夫だ」と思っていたことです。「私は逃げ出さない。」と言っています。「昔からの自分のくびき」というのは、神の律法であり、その教えです。主の教えから出て、自分は自由にされたと思っていました。そして、主から逃げているわけではないと思っていました。ところが、主から与えられた頸木を取り除けたなら、瞬く間に周囲の住民の忌まわしい慣わしを行っていたのです。

パウロはこのことを、はっきりと話しましたね。「ローマ 6:16-18 あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」キリストの教えの中に留まっているのならば、罪から自由にされています。しかしキリストの教えから離れるのであれば、罪の奴隷となっています。また、主ご自身が言われました。「あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。(ヨハネ 14:10)」イエス様から離れません、と言いながら、主が命じられていることから離れることは成り立たないのです。

そして、彼らの結ぶ実が悪いことを主は語られています。そして彼らは、表面的に、自分たちの行為を清めようとしているのですが、全然、清められていません。その理由は、主ご自身とその命令の中に留まっていなかったからです。イエス様は終わりの日に、偽預言者が出てくることを警告された時もそうですが、実で見分けなさいと言われました。そして、主の御名を唱え、主の名によって預言をし、悪霊を追い出し、預言を行なっているにも関わらず、彼らは御国から締め出されるのです。主が何と言われたか、覚えていますか？「不法をなす者ども。わたしから離れて行け。(マタイ 7:23)」でありました。主の命令、その戒めをないがしろにして、それらしいことを行なっても実が結ばれておらず、御国に入ることができないのです。

2:23 どうしてあなたは、『私は汚れていない。バアルたちには従わなかった。』と言えようか。谷の中でのあなたの道を省み、何をしたかを知れ。あなたは、道をあちこち走り回るすばやい雌のらくだ、2:24 また、荒野に慣れた野ろばだ。欲情に息はあえぐ。そのさかりのとき、だれがこれを静めようか。これを捜す者は苦勞しない。その発情期に、これを見つけることができる。2:25 はだしにならないよう、のどが渴かないようにせよ。しかし、あなたは言う、『あきらめられません。私は他国の男たちが好きです。それについて行きたいのです。』と。

エルサレムの住民は、「バアルたちには従わなかった。」と言って、上手に自分のしていることを言っています。神殿礼拝は続けて行っており、バアルの宮に行っている訳ではなかったのです。ところが、ヒノムの谷においてとてつもない忌まわしい偶像礼拝と、性的な乱れに陥っていたのです。人は、このように巧みに他人を欺き、そして自分自身を欺いています。

2:26 盗人が、見つけられたときに、はずかしめられるように、イスラエルの家もはずかしめられる。彼らの王たち、首長たち、祭司たち、預言者たちがそうである。2:27 彼らは木に向かっては、『あなたは私の父。』、石に向かっては、『あなたは私を生んだ。』と言っている。実に、彼らはわたしに背を向けて、顔を向けなかった。それなのに、わざわいのときには、『立って、私たちを救ってください。』と言う。2:28 では、あなたが造った神々はどこにいるのか。あなたのわざわいのときには、彼らが立って救えばよい。ユダよ。あなたの神々は、あなたの町の数ほどもあるからだ。

自分たちのしている恥ずべきことは、必ず明らかにされます。そして大事なものは、私たちは、心に偶像を宿していたら、祈りは聞かれないということです。偶像礼拝の本質は、自分の都合です。神に対しては、自分に便利なもの、自分に都合の良いものに仕えてくれれば良いのです。自分に不都合なことを言わないでくれ、ということで偶像に走ります。同じような姿勢で、ヤハウエなる神、イスラエルの神に祈っても、そこで救ってくれません。なぜなら、イスラエルの神は人格の方だからです。その愛の関係の中から、私たちの祈りと願いを聞いてくださる方です。ですから、神に愛され、神を愛している者だからこそ、主はその祈りを何でも聞いてくださるのです。

2:29 なぜ、あなたがたは、わたしと争うのか。あなたがたはみな、わたしにそむいている。…主の御告げ。…2:30 わたしはあなたがたの子らを打ったが、むだだった。その懲らしめは役に立たなかった。あなたがたの剣は、食い滅ぼす獅子のように、あなたがたの預言者たちを食い尽くした。

主は、ご自身に注意を引き寄せたいために、懲らしめを与えられます。また、預言者を通して戒めを与えられます。そしてそれら預言者を彼らは迫害しました。彼らが神に背いているから、そのことを行なわれているのに、彼らは神に言いがかりを言っているのです。その苦しみについて、「あなたはなぜ、こんな苦しみを与えられるのですか。」と文句を言っているのです。

2:31 あなたがた、この時代の人々よ。主のことばに心せよ。わたしはイスラエルにとって、荒野で

あったのか。あるいは暗黒の地であったのか。どうしてわたしの民は、『私たちはさまよい出て、もうあなたのところには帰りません。』と言うのか。2:32 おとめが自分の飾り物を忘れ、花嫁が自分の飾り帯を忘れるだろうか。それなのに、わたしの民がわたしを忘れた日数は数えきれない。

主の言葉は、まるで自分を暗黒の地に招き入れるようなものではありません。そうではなく、自分を美しく着飾る飾り物のようなものです。自分を拘束して、縛りつけるようなものではなく、自分に幸いをもたらし、むしろ自由にされ、神の栄光を反映させ、祝福されるものです。

2:33 あなたが愛を求める方法は、なんと巧みなことか。それであなたは、悪い女にも、自分の方法を巧みに教えたのだ。2:34 あなたのすそには、罪のない貧しい人たちの、いのちの血が見える。彼らの押し入るのを、あなたが見つけたわけでもないのに。しかも、これらのことがあるにもかかわらず、2:35 あなたは『私には罪がない。確かに、御怒りは私から去った。』と言っている。『私は罪を犯さなかった。』と言うから、今、わたしはあなたをさばく。

彼らが、自分の闇についてそれを隠すことについて、非常に長けていることを主は語っておられます。人は自分について欺くと、実にそれが見えないようにするのに狡賢くなります。そして、こうしたものには蓋をして、自分はきちんと救われていると思っています。「罪はない、神の怒りから免れることができる。」ということができるのです。

2:36 なんと、簡単に自分の道を変えることか。あなたはアッシリヤによってはずかしめられたと同様に、エジプトによってもはずかしめられる。2:37 そこからもあなたは、両手を頭にのせて出て来よう。主があなたの抛り頼む者を退けるので、あなたは彼らによって栄えることは決してない。

先に話しましたように、エジプトに抛り頼んだユダは、結局役に立たず、バビロンによって虐げられ、恥を受けます。

3:1 もし、人が自分の妻を去らせ、彼女が彼のもとを去って、ほかの男のものになれば、この人は再び先の妻のもとに戻れるだろうか。この国も大いに汚れていないだろうか。あなたは、多くの愛人と淫行を行なって、しかも、わたしのところに帰ると言っている。・・主の御告げ。・・3:2 目を上げて裸の丘を見よ。どこに、あなたが共寝をしなかった所があろう。荒野のアラビヤ人がするように、道ばたで相手を待つてすわり込み、あなたの淫行と悪行によって、この地を汚した。3:3 それで夕立はとどめられ、後の雨はなかった。それでも、あなたは遊女の額をしていて、恥じようとしめない。3:4 今でも、わたしに、こう呼びかけているではないか。『父よ。あなたは私の若いころの連れ合いです。3:5 いつまでも怒られるのですか。永久に怒り続けるのですか。』と。なんと、あなたはこう言っている、できるだけ多くの悪を行なっている。」

1 節は、申命記にある律法です(34:1-4)。一度、他の夫のものになれば、再婚することはできま

せん。しかし、靈的にユダは遊女のように、多くの男と関係を持ちながら、なおのこと主なる神のところに帰ろうとしていています。ちなみに 2 節の荒野のアラビヤ人の例えは、かつて創世記で、タマルが遊女の格好をして、ユダが買春をしたところに出ていました。

つまり彼らは悔い改めなしに、自分たちの苦境を主に訴えているということでもあります。あるいは、「中途半端な従順」と言ってよいでしょう。自分のやりたいこと、この欲望をしっかり持っていながら、表面的に主とお付き合いしようとしているのです。それで、主に仕えること、主との関係が形だけのもの、見せかけだけのものになってしまい、心からの関係ではなくなっているのです。自分の中で、他のもっと親密な関わりを持っています。それが何であろうと、主の前に持ってこれないものであれば全て偶像礼拝です。けれども、表立っては主に礼拝している。そうやって自分を偽り、周りを偽り、また神ご自身を本当は慈しみ深い方なのに、酷い方だといって偽ってしまいます。

これから聖餐にあずかりますが、ルカ 23 章 39-42 節を読みます。「十字架にかけられていた犯罪人のひとりはいエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。」と言った。ところが、もうひとりのほうは答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」」二人の犯人は、どちらも同じ、十字架に付けられたキリストを見ている。そして、どちらも救いを求めています。しかし、全く意味が異なった救いを求めています。一方の犯人は、自分の今の苦しみを救えと言っています。けれども、もう一方は、俺たちは自分たちのしたことの刑罰を受けているのだと言っています。自分自身の罪を認めているのです。自分がこのような仕打ちを受けるに値すると認めています。そのうえで、イエス様が御国において自分を思い出してほしいと願っています。自分の罪をしっかり見つめています。今の痛みだけを見るのではなく、自分の罪、そしてその赦しを見つめています。痛みからの救い以上に、罪の赦し、靈的救いが必要なのです。